CONTENTS

第一章　本好き異世界へ　003
第二章　王国の魔女　028
第三章　王子様の誕生日　045
幕　間　赤髪の王女（side：レオネル）　065
第四章　ノエル・リュクサール　086
第五章　騎士団の憂鬱　120
第六章　少女エマ　144
第七章　王国に忍び寄る闇　176
第八章　王妃の呪い　258
特別編　薔薇の貴婦人　295

第一章　本好き異世界へ

放課後を告げる乾いたチャイムが鳴り終わるよりも早く、白石文乃は手慣れた動作で教科書を鞄に滑り込ませた。

高校二年生という、受験の足音が背後に迫り、周囲が将来への不安と期待に浮き足立つ季節。そんな喧騒をすり抜け、彼女が向かう目的地はただひとつ。

――学校の図書室。

文乃にとって、放課後の図書室へ向かう時間は一日の中で最も胸が高鳴る瞬間である。

黒縁眼鏡の奥に宿る瞳は、すでに今日の「獲物」を探し求めて鋭く、それでいて愛おしげに輝く。

この学校の図書室に並ぶ本は、すでにすべて読破済み。

辞書から詩集、図鑑に小説、さらには誰も手に取らないような難解な専門書に至るまで、片っ端から読み尽くした。

だからこそ、新刊が入ったときの喜びは、彼女にとって人生の最重要事項だった。

もし他の生徒から「放課後、何が一番の楽しみ？」と聞かれれば、返ってくるのは部活や買い食い、あるいは友人との尽きないお喋りだろう。

けれど、文乃の答えはひとつしかない。

「図書室で新しい本を借りること」

そう、彼女にとってそれは、多感な時期の恋愛や友情よりもずっと、優先度の高い聖域なのだ。
今日もまた、少し重たいお下げを揺らしながら、文乃は静かに、けれど逸る心で図書室の扉を押し開けた。
文乃は足早に新刊コーナーへと向かった。
今日も貸し出し可能な上限いっぱいまで借りるつもりだ。しかしその前に、まずは新刊の顔ぶれをひと通り、恋人の横顔を眺めるような繊細な視線で確認しなければ――。
棚の前に立ち、手を滑らせぬよう丁寧に順番に背表紙をなぞっていく。すると、あらかじめ頭に叩き込んでいた新刊リストと比較して、実際に並んでいる本の数が一冊足りないことに気づいた。
「……あれ？」
棚から落ちたのだろうか。文乃は思わず床に這いつくばり、視線を近づけて探す。白いブラウスが汚れることを気にすることもなく、隅々まで見渡すが、それでも目的の一冊は見つからない。
必死に探していると、背後からふんわりとした声が聞こえた。
「おーい、何してんの？」
不意に響いたその声に、文乃は弾かれたように顔を上げた。
そこに立っていたのは、幼稚園時代からの付き合いになる幼馴染だった。
文乃とは正反対の人生を歩んでいるような男子。二年生にしてサッカー部の副キャプテンを任されるほどスポーツ万能で、異性からの人気も高い――まさに、眩しい青春の特等席にいるような存在。
「……何か用なら、今は忙しいから後にしてくれる？」

本の所在に気を取られたまま、文乃はぞんざいにそう言い放とうとした。だが、言葉が喉に詰まる。
彼の大きな右手に、さっきまで必死に探していた一冊が、当然のように収まっていたからだ。
「あんた、本なんか読まないでしょ？」
思わず眉をひそめて問いかけると、彼は口の端をわずかに吊り上げ、どこか楽しげに微笑んだ。
「これは俺が先に借りようと手に取ったんだ～。譲ってほしいなら、俺に付き合ってくれない？」
「は？　冗談なら後にしてよ。私は――」
文乃が本を取り返そうと、すばやく彼の右手へと手を伸ばす。だが、その瞬間。
不意に、横から伸びた白い指が二人の間に割り込み、本をするりと奪い去った。
一拍の沈黙が、重く図書室に落ちる。
「――え？」
振り返ると、その本をひょいと掴んでいたのは、同じクラスの女子だった。
「ごめーん、これ私が借りるわ」
口調は軽やかだが、その目は意地悪く細められている。
文乃の背後で、幼馴染が小さく眉をひそめた。女子はその視線を逃さず、わざとらしいほどの笑顔を見せた。
「あーあー辛気臭い。こんな薄暗くて、湿っぽいところにずっといたら、私たちまでカビ臭くなっちゃうわ」
彼女の態度はあからさまだった。幼馴染に向ける執着も、文乃への隠しきれない敵意も。

「その本を返しなさい。本は人が生きた証し。人の人生そのものなのよ！」
凛とした文乃の拒絶は、女子の予想を超えていたらしい。彼女はわかりやすく狼狽え、顔を赤らめた。
「こんなもの、ただの紙の束じゃない！　何マジになってんの⁉　ほら、そんなに大事なら取り返してみなさい？」
女子はわざとらしく、春の風が吹き込む窓際に歩み寄ると、本をひらひらと揺らした。ページがぱらぱらと捲れる音が、やけに冷たく響く。
「ちょ、ちょっと待って！　何してるの！」
文乃は思わず声を上げ、机を回り込んで駆け寄った。
女子は振り返りもせず、唇の端を歪める。
「どうしようかなぁ？　返してあげようかなぁ～」
そのとき、本が窓の外に吸い込まれそうに傾いた。
文乃は女子の手元から滑り落ちそうになった本に、反射的に身を乗り出した。
「返して！」
窓の外に突き出された本を、指先がかすめる。
けれど、女子は冷ややかな笑みを浮かべ、無情にも指先から力を抜いた。
色鮮やかな装丁の紙の束が、宙を舞い、奈落へと落ちていく。
その瞬間、文乃の身体は考えるよりも先に前へと躍り出ていた。

――ガタンッ。
「う！　嘘でしょ⁉」
窓枠を掴む間もなく、重力に引きずられる。
風景が逆さまに流れ、耳をつんざくような風の音が轟いた。
舞い散る花びらの中に、高校年生の春が遠ざかっていく。
「文乃ーーーー！」
幼馴染の叫び声が、遠い記憶の底から響くように聞こえた。
視界が揺れ、急速に深い闇に呑み込まれていく。
最後に見たのは、青空へ落ちていく本の背表紙と、空を切るように伸ばされた、誰かの白く震える手だった。
――意識は、そこでぷつりと途切れた。

文乃が次に意識を取り戻したとき、頬を撫でたのは硬い床の冷たさではなく、春の日差しを吸い込んで微かに熱を帯びた、石畳のざらつきだった。
「……え？」
安堵の吐息を漏らし、彼女はゆっくりと上体を起こした。眼鏡のブリッジを指先で押し上げ、自身

の置かれた状況を確かめるべく周囲を見渡した瞬間――文乃は息を呑んだ。
そこは、彼女の知るどんな場所とも切り離された世界だった。
足元に広がるのは、精緻に整備された石畳の道。その上を、タイヤの唸りを上げる自動車ではなく、木製の荷馬車がガラガラと情緒ある音を立てて行き交っている。道の両側に立ち並ぶのは、石と木材を組み合わせた重厚な建築物だ。二階部分が少し張り出したその構造は、かつて彼女が建築史の本で目を細めて眺めた、中世ヨーロッパの民家そのものだった。
けれど、何かが決定的に違う。文乃が本で知る中世の都市は、もっと不潔で混沌に満ちていたはずだ。道には汚水が溢れ、悪臭が漂い、建物も粗雑であったと記録されていた。
なのに、ここは違う。空気は驚くほど澄み渡り、不快な臭いは一切しない。道端には塵ひとつなく、石畳はまるでモザイクアートのように美しく敷き詰められている。窓ガラスは曇りなく磨かれ、道行く人々の衣服も清潔で、鮮やかな色彩を放っていた。
「いらっしゃい！　新鮮な果物だよ！」
「ママ、見て！　綺麗な色の鳥がいるわ！」
行き交う人々の活気に満ちた声。透き通るような白磁の肌を持つ者、健康的な褐色の肌を持つ者。髪の色も、金、赤、緑、青と、まるで宝石箱をひっくり返したように多種多様だ。その光景は、文乃の脳裏にある「現実」という定義を、音を立てて崩していく。
（……異世界だ）
その言葉が胸に落ちた瞬間、文乃の心臓はドクリと大きく跳ねた。恐怖だろうか。いいや、違う。

胸の奥から湧き上がってきたのは、抑えきれない歓喜だった。大好きな物語の世界に、自らの足で飛び込んだような、めくるめく感覚。
「ふふっ……」
自然と笑みがこぼれた。不思議なことに、通り過ぎる人々の言葉が、まるで日本語のようにスッと頭に入ってくる。店先に掲げられた看板の文字は、見たこともない記号の羅列なのに、なぜか瞬時にその意味が理解できた。
『焼きたてパン』『道具修理』『新鮮野菜』――。
（これが、異世界を舞台にした物語によくある「言語の加護」かしら。……なんて便利なの）
文乃はまるで小説の主人公になったような高揚感に包まれ、興奮気味に周囲を見渡した。もっと見たい、もっと知りたい。この世界の隅々まで、この瞳に焼き付けたい。その純粋な渇望が彼女を突き動かした、そのときだった。
「おい、そこのお前」
突然、背後から重い衝撃が走り、文乃の華奢な肩が掴まれた。驚いて振り返ると、そこにはいかにも強面な、鈍色の鎧を纏った男が立っていた。警備兵だろうか。彼は文乃の顔を覗き込み、眉間に深い皺を寄せる。
「見ない顔だな。その奇妙な服……それに、黒髪に黒目か。どこの国の人間だ？」
「え、あ、私は……」
「怪しい奴だ。ちょっと詰所まで来てもらおうか」

無骨な指が、文乃の二の腕に食い込む。現実に引き戻されるような冷や水を浴びせられ、彼女は必死に声を上げた。

「待ってください！　私は怪しいものではありません、ただ道に迷って……」

「問答無用だ！　話は向こうで聞く！」

警備兵は聞く耳を持たず、彼女を強引に引っ張っていく。抵抗しようにも、鍛えられた男の力には到底敵わない。

（転移早々、牢屋行きだなんて……）

焦燥で視界が滲みかけたそのとき、道端に立てられた一枚の立札が、文乃の目に飛び込んできた。そこには、看板と同じ奇妙な文字で、こう記されていた。

『この文字が読める者、隣に立つ騎士の右肩を三回叩け』

（……え？）

あまりに奇妙な指示。けれど、それは荒波の中で見つけた唯一の浮き木のようだった。立札の横には、警備兵とは明らかに雰囲気の違う、白銀の鎧をまとった騎士が直立不動で佇んでいる。

「離してっ！」

文乃は火事場の馬鹿力を発揮し、警備兵の手を振りほどいた。転げるように駆け出し、白銀の騎士の背後に回り込むと――バン、バン、バン。右肩の甲冑を、思い切り三回叩いた。

騎士が、弾かれたように振り返る。兜の奥から覗く鋭い眼差しが、文乃を見下ろした。

「……何だ、貴様は」

「よ、読めました！　その看板の文字！」

文乃は息を切らしながら訴えた。騎士の瞳が、驚きに見開かれる。

「……本当か？　この古代文字が、読めるというのか」

「はい！『この文字が読める者、隣の騎士の右肩を三回叩け』と……そう書いてありました！」

騎士は数秒間、文乃を凝視した後、短く、重みのある頷きを返した。

「ついてこい。城へ案内する」

慌てて追いついてきた警備兵が文乃の腕を掴もうとするが、騎士は氷のような冷気を孕んだ声で一蹴した。

「……退がれ。一介の警備兵ごときのお前が、我ら王立騎士団の職務を遮るというのか？」

その圧倒的な威圧感に、警備兵の顔色はサッと青ざめ、逃げるように立ち去っていった。安堵する間もなく、文乃は無言で歩き出した騎士の広い背中を追った。辿り着いたのは、街の中央にそびえ立つ、巨大な白亜の城。高い城壁と美しい尖塔という幻想的な光景に圧倒されながら、長い回廊を進んでいく。

やがて辿り着いた執務室で、彼女を待ち受けていたのは一人の男だった。

「連れてまいりました」

騎士の言葉に、男がゆっくりと顔を上げる。

「……ほう。この小娘がか」

その男――王立騎士団長、ガルド・シュタインベルク。大柄ではないが、その体つきは研ぎ澄まさ

れた刃物を思わせた。無駄な肉が削ぎ落とされた、しなやかで強靭な肉体。短く切り揃えられた焦げ茶色の髪と、獲物を狙う鷹のような眼差しが、文乃を値踏みするように射抜いた。彼はただそこにいるだけで、場の空気を支配する「武」のオーラを纏っていた。

ガルドは立ち上がり、無言で顎をしゃくった。

「ついてこい」

案内されたのは、歴史の重みを感じさせる巨大な木の扉の前だった。精緻な彫刻が施されたその扉は、ただならぬ威厳を放っている。

ガルドは、まるで神殿に参拝するかのような、厳格な所作で重い扉をゆっくりと押し開けた。

ギィィィ……。

蝶番の鳴る音とともに視界が開け、文乃は思わず感嘆の声を漏らした。そこは、天井まで届くほどの巨大な本棚が壁一面を埋め尽くす、壮大な王立図書館だった。空気中には古紙とインクの香りが満ち、高い窓からは柔らかな光が差し込んで、宙を舞う塵さえも黄金色に輝かせている。

本を愛する文乃にとって、そこはまさに生涯をかけて探し求めていた天国だった。

ガルドは彼女を中央の大きな閲覧机へと案内し、一冊の古びた革表紙の本を恭しく置いた。

「……読めるか？　これは、我がリュクサール王国の初代国王が記した、国の統治と政治理念に関する重要書だ」

試すような声色。文乃は緊張で渇いた喉を鳴らし、恐る恐るその本に手を伸ばした。表紙に書かれた文字は、やはりあの看板と同じ、見知らぬ記号。

けれど、彼女の脳内では、瞬時にその意味が言葉となって溢れ出していく。

文乃は震える指先で、古びた頁をゆっくりと捲った。そこに記されていたのは、崇高な理念とは程遠い、あまりに人間臭い独白の数々だった。

『〇月×日。今日も愛しのマリアと裏庭で会った。彼女の唇は薔薇のように甘く……』

『△月□日。妻の目が怖い。だが今夜は城下の酒場の踊り子、リナとの約束がある。彼女の豊満な胸に顔を埋めると、王の重責も忘れ……』

「……」

文乃は頁を捲る手をぴたりと止めた。そして、当惑を隠せないままゆっくりと顔を上げ、期待に満ちた眼差しを送るガルドを見つめた。

「あの……」

「どうした？　難解すぎて読めないか？」

「いえ、読めますけれど……」

「ならば内容を言ってみろ。初代国王の崇高なる理念を」

ガルドの真剣すぎる眼差しを前に、文乃は言葉を濁した。けれど、書かれた真実を歪めることは「本好き」としてのプライドが許さない。

「……これ、ただの日記です」

「は？」

「それも……その、初代国王様が、奥様以外の女性と……不倫、でしょうか。逢瀬を楽しんだ記録と

いいますか、ものすごく赤裸々な女性遍歴の日記です」
一瞬、図書館に凍りついたような沈黙が落ちた。
直後、ガルドの顔が憤怒で真っ赤に染まる。
「貴様ッ！　ふざけるな！」
ドォン、と机を叩く凄まじい音に、文乃は思わず肩を震わせた。
「初代国王を愚弄する気か！　そんな不埒な内容が書かれているはずがないだろう！」
「で、でも！　嘘ではありません！　本当にそう書いてあるんです！」
「黙れ！　貴様のような小娘に、王家の歴史などわかるはずが――」
「――いや、その子の言うことは正しいよ、ガルド」
凛とした、けれど楽しげな響きを帯びた声が、静寂の図書室に染み渡った。ガルドの怒声がぴたりと止まる。文乃が振り返ると、書架の陰から一人の青年が優雅に姿を現した。
その姿を見た瞬間、文乃の時間は止まった。
身長は百八十センチほどだろうか。窓から差し込む陽光を浴びて、肩まで流れる金色の髪が後光のように輝いている。陶器のような滑らかな肌、整いすぎているほど端正な顔立ち。そして、文乃を見つめるサファイアのような蒼い瞳は、吸い込まれそうなほど深く、美しい。
（な、何……この美貌……。実写とは思えない、まるで絵画だわ）
彼は優雅な足取りで近づいてくると、呆然とする文乃の横に立ち、春の風のような微笑みを浮かべた。

「初めまして。僕はレオネル・リュクサール。この国の第一王子だ」
「お、王子様……？」
「ああ。そして、君に渡したその本は、間違いなく初代国王の『秘密の日記』だよ」
レオネルは悪戯っぽく片目を瞑ってみせた。ガルドが、信じられないものを見るような目で王子を睨みつける。
「おい、レオネル！　どういうことだ！　俺には『政治の重要書』だと言って渡しただろう！」
「何故って、君まで騙さなければ、あの警備兵を欺くような真に迫った態度は取れなかっただろう？　それに……」
レオネルはクスクスと笑いながら、机の上の日記を指先で弾いた。
「堅物のガルドが、あんなに必死に『不倫日記』を恭しく運んでくる姿……想像しただけで面白いじゃないか。その顔も見れたし、僕は大満足だよ」
「ぐっ！」
ガルドは額に青筋を浮かべ、わなわなと震えていたが、やがて盛大なため息をついて肩を落とした。そして、文乃の方に向き直ると、不器用そうに頭を下げた。
「……すまなかった。怒鳴ってしまって。てっきり、ふざけているのかと思ってな……悪かった」
厳格を絵に描いたような騎士団長が、素直に謝罪する。文乃は驚きつつも、「いえ！」と慌てて首を振った。レオネルはその様子を満足げに見届けると、表情を改めた。悪戯っぽさが消え、その瞳には真剣な「王子の顔」が宿る。

「さて……君をここに呼んだ理由を話そう」
彼は図書館の広大な空間を、慈しむように見渡した。
「この王立図書館には、国の歴史、失われた技術、そして世界の真実が眠っている。だが……ここにある古文書のほとんどは、今や誰も読めない『古代文字』で書かれているんだ」
「読めない……のですか？」
「ああ。正確に中身を解読できる者は、もうこの国にはいない。我々は国中を探した。あの立札は、失われた文字を読める『稀人（まれびと）』を見つけるための、最後の賭けだったんだ」
彼は一歩、文乃に近づいた。
「君には、その才能がある。……いや、君こそが、僕たちが待ち望んでいた存在だ」
レオネルは文乃の手を取り、その長い指で優しく包み込んだ。
「頼む。この王立図書館の司書となり、ここに眠る古文書を解読してほしい。君の力で、この国に眠る『声』を蘇らせてくれないか？」
文乃の胸の奥が、熱い波動に満たされた。
この図書館の本たちは、書いた者の意思を誰にも伝えることなく、永い眠りについていた。それを呼び起こす力が、今、自分にはある。
「はい！　私が必ずこの子たちを、永遠の眠りから起こしてみせます！」
文乃は彼の両手を握り返し、少し潤んだ瞳で力強く頷（うなず）いた。レオネルの顔が、花が咲くように明るくなる。

「ありがとう。やってくれるか」
「はい！　こんなにたくさんの本が読めるなんて、私にとってはご褒美みたいなものですから」
「そう言ってもらえると助かるよ。――では、解読した古文書は、一冊ごとに詳細な『報告書』としてまとめ、その進捗（しんちょく）も毎日、細かく私に報告してくれ」
「……はい？」
文乃の動きがぴたりと止まった。感動的な余韻の中に、突如として投げ込まれた「報告書」「進捗管理」という、極めて現実的で世俗的な単語。
「あの……読むだけでは、いけないのでしょうか？」
「読むだけでいいわけがないだろう？」
レオネルは不思議そうに首を傾（かし）げた。
「これは遊びじゃない。王国の行く末を担う、重要な国家プロジェクトだ。当然、解読内容の文書化と、アーカイブの作成、そしてリスク管理のための定時報告は必須だよ」
（うわぁ……）
文乃の脳内で、キラキラと輝いていた「本の楽園」が、一瞬にして「ブラックな職場」へと塗り替えられた。好きな本を読むのは至福の時間だ。けれど、それを仕事として、お堅い報告書にまとめるとなると話は別である。
「報告書……めんどくさい……」
思わず、本音が漏れた。その瞬間、横にいたガルドが、信じられないものを見るような目で文乃を

射抜いた。
「き、貴様……っ！『めんどくさい』だと!?」
ガルドのこめかみに青筋が浮かぶ。
「ここにある古文書は国の宝だぞ！　それを面倒とは、どれだけ無礼な――」
「まあまあ、いいじゃないかガルド。それくらい素直な方がいい」
レオネルは楽しそうにガルドを制すと、文乃の顔を覗き込んだ。
「確かに、これを一人で記録するのは骨が折れる作業だ。タダ働きさせるわけにはいかないな」
彼は優雅に指を一本立てた。
「なら、こうしよう。一冊解読するごとに、その労力に見合った十分な『給金』を出すというのはどうだ？　もちろん、衣食住の保証とは別にね」
「給金」
その甘美な響きが、文乃の鼓膜を震わせた。
（お金がもらえる。しかも、大好きな本を読むだけで！）
カシャン、と文乃の中で、何かのスイッチが切り替わる音がした。彼女はスッと背筋を伸ばし、先ほどまでの曖昧な姿勢を正した。そして、完璧な角度でお辞儀をする。
「改めまして。わたくし、白石文乃と申します」
顔を上げ、凛としたビジネス用の笑顔を浮かべる。
「その条件、謹んでお受けいたします。報告書でも進捗管理でも、何なりとお申し付けくださいませ、

クライアント様」
「ぶっ……あはははは！」
レオネルが堪えきれずに吹き出した。お腹を抱えて、涙目になりながら笑っている。
「凄いな、君は！　さっきまでの不満顔が嘘のようだ！　ははは、現金だなぁ！」
「生きるためには、先立つものが必要ですので」
文乃は凛とした表情で、迷いなく答えた。その横ではガルドが「こいつ……信じられん……」と頭を抱えていたが、彼女の耳には届かない。大好きな本に囲まれて過ごし、その上、正当な報酬まで得られる。彼女にとってこの場所は、まさに天国に他ならなかった。
ひとしきり笑い転げた後、レオネルは目尻に浮かんだ涙を指先で拭い、改めて文乃へと向き直った。
「気に入ったよ、文乃。その裏表のない性格、この城では何より貴重なものだ」
彼は優雅に右手を差し出した。
「改めて紹介しよう。僕は第一王子のレオネル・リュクサール。そして、こっちで頭を抱えている堅物が、僕の幼馴染で騎士団長のガルドだ。……よろしく頼むよ、我らが『救世主』殿」
「こちらこそ、よろしくお願いいたします」
文乃はその手を、今度は対等な「契約」の証しとして、力強く握り返した。
「さて、契約成立だな。そうと決まれば、まずは形から入るとしよう」
レオネルは満足げに頷くと、文乃の服装を上から下まで品定めするように眺めた。
「君が司書として働くにあたって、ふさわしい仕事着が必要だ。すぐに城の使用人に命じて、新しい

衣服を用意させよう」
「衣服、ですか？」
その言葉に、文乃はハッとして、目の前の男たちの服装を改めて観察した。
騎士団長であるガルドは、無駄のない強靭な肉体に、白銀と黒鉄のハーフプレートを纏っている。その下には黒い肉厚の乗馬ズボンと、重歩兵用のタフな金属入りブーツ。実戦を潜り抜けてきた凄みはあるが、見るからに重そうだ。
一方、第一王子であるレオネルは、仕立ての良い純白の最高級リネンシャツを着こなしている。襟元をボタン二つ分ほどルーズに開け、袖も肘まで無造作に捲り上げ、その上からベルベットベスト。ボトムスはスマートな乗馬ズボンに、完璧に磨かれた黒革のロングブーツ。右手の人差し指には、黄金の獅子が刻印された、重厚なゴールドのサインリングが鈍く光っている。
（うわぁ……いかにも中世ファンタジーの王族と騎士って感じ。確かに格好いいけど……）
さらに文乃の脳裏に、先ほど見かけた城内のメイドたちの姿が浮かんだ。シワ一つない純白のエプロンに、首元までがっちりと詰まった窮屈そうなクラシカルなメイド服。
（無理無理無理！　あんなガチガチの衣装で長時間のデスクワークなんてさせられたら、私の軟弱な現代人ボディは三日でへし折れるわ……！）
危機感を覚えた文乃は、すっと人差し指を立てて、笑顔のまま労働条件の交渉に切り替えた。
「レオネル様。雇用に関する要望――いえ、労働環境に関するご提案が一つあります」
「ん？　なんだい？」

「お洋服の件ですが、新しく仕立てていただく必要はありません。できれば……このままの格好で、司書としての仕事にあたりたいのです」
文乃は自分の着ているセーラー服の裾を、誇らしげに少しだけ広げてみせた。
「この服は、私が生まれ育った国の伝統的な衣装……いわば、由緒正しき正装なのです。機能性にも優れており、我が故郷の知識人（学生）は皆、これを纏って日夜学問に励んでおります。本を読み解く仕事をするなら、この衣装が最も高いパフォーマンスを発揮できるかと」
大嘘は言っていない。日本の伝統的な学生服（セーラー服）の利便性を、文乃は熱弁した。ガルドが背後で「言われてみれば確かに、どこか趣のある服装だ……」と真面目に納得しかけている。
だが、レオネルはサファイアの瞳を細め、面白がるように片眉を上げた。
「なるほど、故郷の正装か。それは尊重したいが……文乃、その服の『予備』はあるのかい？　毎日同じ服で執務をさせるわけにはいかないだろう」
「あ……」
文乃の思考がピキリとフリーズした。
しまった、と冷や汗が流れる。手ぶらで異世界に飛ばされたのに、予備のセーラー服なんてあるはずがなかった。
（やばい、このままだと明日からガチガチのレトロメイド服で過ごすことに……！）
あからさまに泳ぐ文乃の黒縁眼鏡の奥の瞳。
それを見たレオネルは、すぐにすべてを察したように「ふっ」と優しく吹き出した。

「はは、わかりやすいな。まあいいさ、事情は追々聞くとしよう。……アルノルト」
「はっ。ここに」
レオネルが呼ぶと、どこからともなく白髪を完璧に撫でつけた老執事が、影のように姿を現した。
「王室御用達の仕立て屋を呼べ。文乃が着ているその『伝統衣装』の作りを調べさせ、可能な限り同じものを作らせるんだ。洗い替えも含めて三着ほどな」
「畏まりました。ただちに手配いたします、殿下」
老執事は完璧なお辞儀をして、再び音もなく退室していった。
文乃は胸を撫で下ろし、今度は心からの感謝を込めて微笑んだ。
「ご理解ありがとうございます、レオネル様。最高の仕事でお返しいたしますね」
「期待しているよ」
レオネルは悪戯っぽくウインクしてみせ、文乃の「快適な読書生活」は、こうして無事に守られた。
そのときふと、彼女の中に澱んでいた素朴な疑問が口をついた。
「ところで、一つ伺ってもよろしいでしょうか？」
「なんだい？　報酬の交渉なら、後で財務官を通すが」
「いえ、そうではなくて……。どうして初代国王様は古代文字を自在に操れたのに、その技術は継承されなかったのですか？」
それこそが最大の謎だった。日記を綴るほど流暢に使いこなしていたのなら、なぜ子孫に教えなかったのか。そうすれば、国の歴史が失われる悲劇は起きなかったはずだ。

「ああ、それか」
レオネルは、今日の天気を語るような軽い調子で応じた。
「初代国王は代々古代文字を受け継ぐ由緒ある家系だった。だが……さっきの日記を見ただろう？」
「ええ。あまりに赤裸々な不倫日記でした」
「そう。彼は自分の情事や性癖を、誰にも知られないよう古代文字で綴っていた。だから――」
レオネルは可笑しそうに肩をすくめた。
「『死後、自分の恥ずかしい日記を子孫に読まれたくない』。……ただそれだけの理由で、彼は次の代への古代文字の伝承を途中でやめてしまったんだよ」
「……は？」
文乃の思考が停止した。隣を見ると、ガルドもまた口を半開きにして固まっている。彼にとっても初耳の衝撃だったらしい。
「そ……それだけの理由で、一国の文化が？」
「うん。『リナの胸は最高だった』なんて感想を息子に読まれるのが、死ぬほど嫌だったらしい。結局、妻である王妃には筒抜けだったようだけどね」
文乃とガルドは顔を見合わせ、同時に深く、重いため息を吐き出した。
「くだらない……」
「……俺たちが命を懸けて守ってきた王家の秘密が、そんな……」
ガルドが膝から崩れ落ちそうになっている。一国の歴史が、一人の男の「黒歴史隠し」のために断

絶したという事実に、文乃も眩暈を覚えた。
「――さて、文乃。感傷に浸る時間は終わりだ」
レオネルの表情が、不意に為政者のそれへと引き締まった。
「君に解決してもらいたい緊急の課題がある。現在、王国内で頻発している原因不明の災厄――人々が『魔女の呪い』と呼ぶ事態の解決策を、この図書館の古文書から最優先で探し出してほしい」
王国の危機。その重責に背筋が伸びるのを感じながら、文乃は好奇心という名の火を灯した。
「わかりました。まずは情報の整理から始めます」
彼女は気合を入れ直し、一番近くの本棚へと向き直った。しかし、一冊目の背表紙を読んだ瞬間、その動きが止まる。『王国・建国史』。その隣には『保存食の世界』、さらにその隣には『世界の花々』と『貴族のメイク術』が並んでいた。
「……殿下。どうして歴史書の隣に料理本が？」
「どうしてって……。僕たちは文字が読めないんだ。内容がわからないのに、整理整頓などできるはずがないだろう？」
文乃は仰ぎ見るような巨大な書架を見上げた。何万冊もの蔵書が、ジャンル無用でシャッフルされている地獄の光景。
「……不可能です。砂浜でコンタクトレンズを探すようなものです！」
「こんたく……？　よくわからんが、とにかく難しいのだな？」
「いいえ、不可能です！　まずはこの図書館すべての書物の『分類』と『整理』をやり直さなければ、

仕事になりません！」
文乃は決然とレオネルを見据えた。
「殿下。助っ人をお願いします。できるだけ体力のあり余っている、力自慢の方々を」
――三十分後。
静寂に包まれていた王立図書館は、鎧の擦れる不穏な音と、男たちの熱気に占拠されていた。百人近い屈強な王立騎士団が、魔物と対峙するかのような悲壮な覚悟を顔に張り付かせ、整列している。
その前に立ったのは、制服姿の小柄な少女。
「これより、図書館にあるすべての本の大移動と整理を行います！」
騎士たちの顔が、一斉に青ざめた。不満のざわめきが広がりかけるが、レオネルが優雅な微笑みの裏に王者の威圧感を忍ばせ、一言で封じ込める。
「これは我が国の未来を左右する『聖戦』である。――拒否権はないよ」
「それでは作業開始！　第一部隊は運び出し、第二部隊は戻し！　装丁が古い本は慎重に！　この本たちは王国！　いえ！　人類の宝です！　絶対に傷つけないで！」
文乃の号令が、地獄のキャンプの幕開けを告げた。閲覧机の上に仁王立ちになり、彼女は次々と鋭い指示を飛ばす。本を愛する彼女にとって、知識の海を守るためなら、相手が歴戦の猛者だろうが容赦はない。
「そこ！　背表紙を掴まない！　本が傷むでしょう！」
「それは芸術書です！　料理本の棚に交ぜないで！　もっと丁寧に扱って！」

王国最強の騎士たちが、古びた本と少女の怒号に翻弄され、脂汗を流して奔走する。その光景を、レオネルは特等席で紅茶を飲みながら楽しげに眺めていたが、公務をサボっていることがバレ、現れた老執事に襟首を掴まれ、ずるずると執務室へ引きずられていった。

王子が消えた扉を見送り、騎士たちが安堵のため息を吐いたそのとき。

「誰が手を止めていいと言いましたか？」

地獄の底から響くような声に、彼らは錆びついた人形のように首を回した。文乃は眼鏡を指で押し上げ、ひどく美しく、残酷な笑みを浮かべた。

「現場責任者は、私です。ノルマ達成まで、誰一人帰れると思わないでくださいね？」

ステンドグラス越しに差し込む朝日が、図書館を神々しく照らし出していた。そこには、戦い抜いた騎士たちが床に崩れ落ち、死屍累々の光景が広がっていた。あのガルドでさえ、壁に背を預けて荒い息を吐いている。

けれど、文乃はその光の中に凛と立ち尽くしていた。目の前には、完璧に分類され、背の順に美しく並べられた本棚の列。歴史、文化、科学、芸術――秩序を取り戻した知識の殿堂が、朝日を浴びて黄金色に輝いている。

徹夜の重労働だったはずなのに、彼女の身体は不思議と軽かった。

（これが、私の城。私の戦場だわ）

整然と並ぶ背表紙を眺め、悦に入っている文乃の背後で、騎士たちが「悪魔だ……あいつは悪魔だ……」と震えながら呟いていたが、彼女は心地よい達成感の中で、ただ美しく微笑んでいた。

第二章 ✷★王国の魔女

翌日。

王立図書館の片隅で、文乃は自分だけの城を築いていた。豪奢な彫刻が施されたマホガニーの机には、塔のように積まれた古文書の山。小柄な文乃の姿が隠れてしまうほどの量だ。静寂の中、彼女の指先がリズミカルにページを捲り、さらさらと流れる黒髪がわずかに揺れる。カリカリとペンを走らせ、時折、黒縁眼鏡の奥の瞳を細めて「うーん」と唸る。古紙とインクの香りに包まれたその空間は、彼女にとって何物にも代えがたい至福の場所だった。

「解読作業は順調かい？」

不意に背後からかけられた軽やかな声に、文乃は顔を上げる。そこに立っていたのは、公務を終えた第一王子、レオネル・リュクサールだった。窓から差し込む光を浴びて、肩まで流れる黄金の髪がさらりと揺れる。陶磁器のように滑らかな肌に、宝石のような蒼い瞳。ただ立っているだけで絵画のようなその美貌は、図書館の埃っぽい空気すら浄化するようだ。

「何かご用でしょうか、殿下」

「用事がなくては来てはいけないのか？　……と言いたいところだが、実は君に渡すものがあってね」

そう言って彼が差し出したのは、一冊の黒革の報告書だった。レオネルの白く優美な指先とは対照

的に、その黒い表紙はどこか重苦しく、血の匂いすら感じさせるような生々しい気配を纏っている。

文乃がそれを開くと、そこには戦慄すべき記録が綴られていた。

――ある日を境に、突如として狂い始める者たちが現れた。人格は崩壊し、家族や隣人に牙を剥き、幻覚に怯えて暴れ回る。

「これは……」

文乃が息を呑む。眼鏡のブリッジを人差し指で押し上げ、食い入るように文字を追う。

報告書は続く。狂気に囚われた者を、人々は〝魔女〟と呼んだ。恐怖に駆られた民衆は彼らを家に閉じ込め、火を放ち、葬る。憎悪の連鎖は地方から徐々に広がり、件数は年々増加の一途を辿っているという。被害が酷い場所に至っては、誰もが隣人を疑い、家族すらも信じられない状態だ――。

「……魔女事件。ただの迷信や噂話ではなさそうですね」

パタン、と重い音を立てて報告書を閉じると、図書館に沈黙が落ちた。文乃は深いため息をつく。

魔女。狂気。炎に包まれる家。けれど、文乃の大きな瞳に浮かんだのは恐怖ではなかった。それは、喉の奥に小骨が刺さったような、強い違和感だった。

（ありえない……いや、ここは異世界だから、ありえるの？）

自問してみても、文乃の理性が首を横に振る。

彼女は現代日本で生まれ育った人間であり、その中身は論理的な現代人そのものだ。いくらここが異世界であっても、現象には必ず「理屈」があるはずだ。

昔の世界だってそうだった。地震は神の怒り、疫病は悪魔の呪い。人々は理解できない現象を、超

自然的な存在のせいにした。けれど、先人たちは諦めなかった。観察し、仮説を立て、失敗を重ね、答えを突き止めてきた。その血と汗の積み重ねが「歴史」として本に残り、世界を形作ってきたのだ。

文乃は机の上に視線を落とし、並べられた分厚い本の背表紙をそっと撫でた。ここにも、きっと同じように――誰かが残した答えが眠っているはずだ。

（〝魔女〟なんて言葉で思考停止したくない。必ず、原因を突き止めてみせる）

顔を上げた彼女の瞳には、もはや不安の色はなく、探求の炎が静かに燃えていた。文乃は再び報告書を開き、今度は感情を排して細かな記述に目を走らせた。

「発熱……悪寒……そのあと、突発的な暴力性の増大……」

ページを捲る指先がピタリと止まる。さらに読み進めると、被害を受けた村々で、家畜の流産や異常死が多発しているとの記録があった。村人たちはそれを「魔女の呪い」だと恐れたが、文乃には違う景色が見えていた。

文乃は以前、王立騎士団の面々を巻き込んでこの広大な図書館の書物をジャンルごとに分類した。その際に記憶していた「医学」のエリアへと、彼女は迷いのない足取りで歩を進める。

整理したとはいえ、棚を埋め尽くす医学書の冊数は圧倒的で、気の遠くなるような光景が広がっていた。だが、文乃の心に迷いはない。彼女は本棚の最下段の隅にある古い一冊を手に取ると、その場にぺたんと座り込み、吸い込まれるようにページを捲り始めた。

パラパラパラ、と乾いた音が静寂に響く。

傍らに控えるレオネルと、護衛として付き従っていた騎士団長ガルドが、思わず息を呑むほどの速

度だった。文乃が文字を追う黒縁眼鏡の奥の瞳は、まるでスキャナーのように鋭く、一瞬で紙面の情報を吸い上げていく。

ものの数十分で厚い医学書を読み終えたかと思うと、彼女はパタンと本を閉じ、すぐに元の位置へ戻した。そして間髪容れずに、その隣に並んでいた別の本を引っ張り出す。

その一切の無駄がない、しかし狂気じみた読書スピードを目の当たりにして、レオネルは綺麗なサファイアの瞳を丸くし、呆然とした声を上げた。

「……文乃、君はまさか、ここにある医学書を最初から一冊ずつ、すべて順番に読んでいくつもりなのか？」

問われた文乃は、本から目を離さないまま、至って平然とした表情で答える。

「もちろんです。何が手掛かりになるかわかりませんから。片っ端から当たるのが一番確実です」

「だったら、せめてあそこの机に移動して読んだらどうだ？　そんな冷たい床に直に座り込んでいては、身体を壊すだろう？」

心配そうな、そしてあまりの無鉄砲さに呆れ果てたような王子の提案。しかし、文乃は眼鏡の位置をクイと直すと、すげなく首を横に振った。

「いいえ。机とこの棚を往復する時間がもったいないので、このままでいいです。一秒でも早く答えを見つけたいですから」

あまりにも直球な司書の正論に、レオネルはこれ以上言葉を紡ぐことができず、ただ小さく肩をすくめた。

だが、呆れ果てた彼の胸の奥には、確かな熱い感情が灯っていた。この国の誰もが「魔女の呪い」だと恐れ、思考を放棄して目を背けている凄惨な問題。それに対して、ただ一人、この小さな少女だけが、真っ向から真実を暴こうと命を燃やしている。

レオネルは長い金髪を優しく揺らす斜陽の中で、ただひたすらに、一心不乱に本を読み漁る文乃の横顔を、言葉を失ったようにじっと見つめ続けていた。

――そして、夜が訪れる。

静まり返った深夜の図書館を、レオネルは再び訪れていた。手元を照らすランプの灯が、暗がりの本棚をぼんやりと浮かび上がらせる。

昼間と同じ場所。文乃は、数冊の分厚い医学書に囲まれたまま、本棚に背を預けて小さく丸くなっていた。眼鏡が少し斜めにずり落ち、規則正しい小さな寝息が聞こえてくる。限界まで脳を酷使し、そのまま眠りに落ちてしまったのだろう。

「……無茶をする」

レオネルはそっとランプを置くと、彼女を起こさないよう、細心の注意を払ってその華奢な身体をそっと腕の中に抱き上げた。驚くほど軽くて折れそうな身体。このか弱い少女が、国を救おうと一人立ち向かってくれているのだ。

彼は文乃を近くの柔らかなソファへと静かに横たえ、ずれた眼鏡をそっと外して机に置いた。そして、あらかじめ用意していた厚手の毛布を優しく身体にかける。月光に照らされた彼女の寝顔をしばし見つめた後、王子は足音を忍ばせ、静かにその場を立ち去った。

翌朝。

差し込む眩しい朝日に目を覚ました文乃は、自分の仕事机で、用意されていた簡単な朝食をとっていた。スープをごくりと飲み干した、ちょうどそのとき。

「おはよう、文乃。よく眠れたかい？」

レオネルがふらりと姿を現した。窓からの朝光を浴びたその姿は、相変わらず非の打ち所がないほど絵画的に美しい。

文乃はスープ皿を置くと、真っ直ぐに彼を見つめた。

「おはようございます、殿下。……それから、昨夜はありがとうございました。ソファまで運んで、毛布をかけてくださったのは殿下ですよね？」

直球の感謝の言葉に、レオネルは一瞬だけサファイアの瞳を泳がせ、形の良い指先で気まずそうに黄金の髪をいじった。

「な、何のことかな？　私はただ、夜中に大事な古文書がネズミにでも齧られてはいけない思ったから、通りかかっただけで……」

あからさまに頬を微かに染め、視線を逸らして惚ける王子。そのどこか子供っぽくい表情を見て、文乃の唇からふっと悪戯っぽい笑みがこぼれた。

「ふふ、何をそんなに恥ずかしがっているんですか、殿下。素直に『風邪をひかないか心配だった』と言えばいいのに」

「ぐ……！　ま、まぁ文乃には一刻も早く、この問題を解決するという重大な任務があるからな。今

体調をくずされては困る」

狼狽えるレオネルを少しからかって満足したのか、文乃は「ごちそうさまでした」と手を合わせ、椅子から立ち上がった。その瞬間、彼女の纏う空気が、からかいのそれから一変して、真剣なものへ切り替わる。

「さて、朝食もいただきましたし、気合を入れ直して作業に戻ります」

文乃は再び本棚の前に戻り、昨日付箋代わりにメモを挟んでおいた一冊の医学書を力強く開いた。ページを捲る指先に、再び驚異的な集中力が宿る。感情を排し、冷徹に、しかし祈るような想いで記述の森を彷徨う。

そのとき、ページを捲る指先が――ある一ページで、ピタリと止まった。

「これって……病気の流行じゃないの？」

小さく漏れた呟きを、レオネルは聞き逃さなかった。

「病気だと？　文乃、これは国も教会も魔女の所業だと結論づけて恐れている怪異だぞ」

「では、王子はこの世界で、魔法というものを実際に見たことはありますか？」

レオネルは一瞬虚を突かれた顔をし、無言で首を横に振った。長い金髪がわずかに乱れる。文乃は真っ直ぐに彼を見据えた。

（やっぱり…この世界は魔法が存在しない、もしくは存在しても知られていない世界なのか…）

「わかりました。では、その〝魔女〟をこの目で見せてください」

レオネルの整った表情が凍りついた。

「……正気か？　確かに王都の地下牢に一名幽閉されているが、人を殺しかけた凶悪な存在だ。近づけばお前のような華奢な身体など、ひとたまりも――」

「それでも」

文乃はきっぱりと遮った。

「私は見たいんです。知りたいんです。何も知らないまま、恐ろしい存在だと決めつけるのは、先人たちが積み上げてきた知識を踏みにじることですから」

彼女の声は震えていなかった。小柄な彼女が、長身の王子を見上げるその瞳には、確かな意思の光が宿っていた。レオネルはしばしその瞳に見惚れるように黙り込み、やがて敗北を認めるように苦笑した。

「……わかったよ。私の負けだ」

隣でガルド団長が盛大なため息をつき、分厚い胸板を揺らした音が聞こえたが、文乃は気にしなかった。過去の偉人たちが残してくれた知識を武器に真実を暴く――その覚悟は、すでに決まっていた。

石の階段を降りるたび、ひんやりとした死の匂いを含んだ空気が肌を刺す。文乃はガルドの鍛え抜かれた広い背中に守られるようにして、王国の地下牢へと足を踏み入れた。

鉄格子の向こう。冷たい石床の上に、一人の女性が横たわっていた。ボロボロの衣服、やつれた顔、焦点の合わない虚ろな瞳。次の瞬間、彼女は誰もいない闇の奥に向かって、鼓膜を裂くような甲高い絶叫を上げた。

「――っ！」

ガルドが反射的に腰の剣の柄に手をかけ、身構える。だが、文乃は冷静だった。彼女は眼鏡の位置を直し、鉄格子の隙間から女性の状態を凝視した。

（幻覚……錯乱……意識の混濁。それに、あの痙攣……）

女性の身体は小刻みに震え、意思とは無関係に跳ねていた。それは狂気というより、「症状」だった。

さらに目を凝らすと、彼女の手足が赤く腫れあがり、指先や爪の先が炭のように黒く変色しているのが見えた。血の巡りを失った末端が、壊死しているのだ。

「これは……神経毒による血管の収縮……？」

文乃の脳内で、報告書の内容と目の前の惨状が線で結ばれていく。家畜の流産。人間の錯乱。手足の壊死。すべてを説明できる一つの仮説が、頭の中で形を成した。

（これは呪いなんかじゃない。病気だわ……それも、毒による）

魔女と呼ばれた女性の、助けを求めるようなかすれた呼吸音が、牢獄の壁に反響する。その音を聞きながら、文乃はスカートの裾を掴み、強く拳を握りしめた。彼女を救えるのは、祈りでも魔法でもない。「知識」だけだ。

地上に戻った文乃は、息つく間もなく王立図書館へと駆け込んだ。高い天井までそびえる本棚を見上げ、彼女は祈るように呟く。

（必ず……答えはこの中にあるはず）

机に報告書と自分のメモを広げ、情報を整理する。

幻覚、錯乱、痙攣、壊死。家畜の流産。症状の広がり方からして、空気感染ではない。水でもない。ならば――。

「……食料」

文乃は顔を上げ、ガルドを見た。

「ガルドさん、農民たちの主食は何ですか？」

「主食？　ああ、ライ麦の黒パンだな。平民ならどこの農村でもそうだ」

その答えを聞いた瞬間、文乃の脳裏に稲妻が走った。かつて読み耽った本の一節が、鮮明に蘇る。

中世ヨーロッパ。ライ麦を食べた人々に起きた、狂気と死の連鎖。手足が黒く焼け爛れ、村ごとに壊滅をもたらした恐怖の病。

「……『聖アントニウスの火』！」

文乃の声が、広大な図書館に凛と響いた。偶然ではない。必然だった。かつての歴史を記した

〝本〟が、時空を超えてこの異世界の謎を照らし出したのだ。
「『聖アントニウスの火』……麦角菌（ばっかくきん）というカビの毒による、大規模な食中毒事件よ」
その言葉に、ガルドとレオネルが息を呑む。文乃は迷いなく命じた。
「ガルドさん！　王立騎士団を全員、今すぐ招集してください！」
――そして、再び地獄が始まった。
図書館の大広間には、ぎっしりと並ぶ鎧姿の騎士たち。筋肉隆々の大男たちが百人も集まると、その圧迫感は凄まじい。だが、彼らの顔色はまるで断頭台へ引かれる罪人のようだった。
「ま、まさか……また本の仕分けじゃ……」
「俺はもう、背表紙を見るだけで吐き気が……」
一人が脱走を図ろうとした瞬間、ガルドの怒号が飛んだ。
「逃げるな馬鹿者ども！　これは魔女と恐れられる民を救い、国を守るための任務だ！　それでも逃げ出すというなら、今すぐ鎧を脱いで去れ！」
その一喝に、騎士たちの瞳に覚悟の光が戻る。
「……民を守るのが、騎士の務め！」
「そうだ、本の虫になるくらいなんだ！」
「もう怖くないぞ！」
悲壮な決意とともに、捜索が始まった。塔のように積まれた歴史書の山。文乃は騎士たちが運んでくる本を片っ端から開き、驚異的な速度で内容を精査していく。

「……ダメ、効率が悪すぎる」
数十分後、文乃は手を止めた。額に滲む汗を拭う。古代文字を読めるのは彼女一人。これでは間に合わない。焦りが滲み始めたその時、レオネルが口を開いた。
「文乃。全部を読む必要はない。必要な『単語』を君が挙げてくれれば、我々がそれを手掛かりに文字の形を探し出す。そうすれば、関係する書物を絞り込めるはずだ」
文乃は目を見開いた。
「……なるほど。画像検索のように、文字の形を照合するということね」
文乃はすぐさま机上の羊皮紙に手を伸ばした。
「必要なのは……『麦角』『中毒』『黒い変色』……」
古代語でその単語を書こうと意識を集中させた、その瞬間だった。
――パチンッ。
空気が弾けるような音がして、文乃の手の中に光り輝く一本の万年筆が現れた。まるで星の欠片（かけら）で作られたような、淡い青い光を纏う美しいペン軸。
「なっ……!?　い、今のは……！」
驚愕に目を剥く騎士たちをよそに、文乃は不思議と落ち着いていた。掌に馴染むその感触。これは私の意思に応える、私だけの武器だ。
（これってもしかして、異世界転移物につきもののチート能力!?）
ペン先が羊皮紙に触れる。すると、今まで書いたこともない複雑な古代語が、頭の中から湧き水の



ように溢れ出し、スラスラと美しい文字列となって刻まれていく。レオネルが呆然と呟く。
「……これは、奇跡か……？」
文乃は無心で書き上げた羊皮紙を掲げた。
「これが手掛かりです！　この文字の形と同じ記述がある本を、探してください！」
「総員、掛かれぇッ！」
ガルドの号令とともに、騎士たちが一斉に散る。鎧の金属音が図書館中に響き渡る。
時間は無慈悲に過ぎていった。窓の外に深い闇が降り、夜中の零時を回ろうとした、そのとき。
「……ありましたーーーー！」
一人の若い騎士の叫び声が、静寂を切り裂いた。
彼が埃にまみれた手で掲げたのは、一冊の古い書物。文乃は駆け寄り、祈るような手つきでそれを受け取った。
「……これだわ」
革の表紙を開き、ページを捲る。そこには、地下牢で見た症状と完全に一致する記録――発熱、幻覚、痙攣、壊死――が記されていた。そして、その病の名は『黒穂病（こくほびょう）』。やはり、麦角菌による中毒だったのだ。
しかし、文乃の手が止まったのは、そのあとのページだった。そこには、医学的な記録だけでなく、著者の血を吐くような独白が綴られていた。
『私の愛する娘、エレナが死んだ。手足が黒く焼け、狂乱の中で息絶えた』

『私は医師でありながら、悪魔の憑依だと決めつけ、娘を地下牢に閉じ込めてしまった。なぜもっと早く、麦の異常に気づけなかったのか』

『この書を遺す。未来の誰かが、二度と同じ過ちを犯さぬように。娘のような犠牲者を、二度と出さぬように――』

インクの滲みは、著者の涙の跡だろうか。数百年の時を超えて、娘を失った父親の悲鳴と、未来への切実な祈りが、文乃の胸に流れ込んできた。

（……受け取ったよ）

文乃は埃っぽい本を胸に抱きしめ、強く目を閉じた。あなたの悲しみは無駄にしない。あなたの残した知識が、今、この国を救うのだから。

カッ！

文乃の決意に応えるように、手の中の万年筆が眩い光を放った。彼女は新しい羊皮紙を広げ、憑かれたようにペンを走らせた。著者が命懸けで記した「対策」を、現代の知識で補強し、完璧なマニュアルへと昇華させていく。

「……原因は『黒穂病』。麦角菌に汚染された穀物による食中毒です」

書き終えた羊皮紙を手に、文乃は王子の前で高らかに宣言した。

「対策はあります。汚染された麦の廃棄、塩水による麦角の除去、そして輪作による予防。――これは、防げる病気です！」

その言葉が図書館に響いた瞬間、張り詰めていた空気が一気に解けた。ただ呪いだと怯えていた騎士たちが、それは「戦える敵」なのだと理解し、希望の表情を浮かべる。レオネルは深く頷き、静かに拍手を送った。

「見事だ、文乃。……君は、本当に救世主かもしれないな」

「いえ、まだです」

文乃は眼鏡の奥の瞳を鋭く光らせ、騎士団を見渡した。

「この情報を、国中の農民に伝えなければ意味がありません。つまり――」

彼女はニッコリと、悪魔的かつ魅力的な笑みを浮かべた。

「この報告書を、全町村に行き渡る枚数だけ、今すぐ書き写さなければなりません」

王立騎士団員たちの屈強な顔から、サーッと血の気が引いていく。

「また……徹夜……？」

絶望的な空気が流れたそのとき、ガルドが一喝した。

「筆を取れ！　お前たちのペンが、剣よりも多くの命を救うのだ！　証明してみせろ、王立騎士団の誇りを！」

「「はっ!!」」

こうして、王立図書館の夜は、剣戟の代わりにペンの走る音が響き続けることとなった。

朝日が昇る頃、ついに国中へ配布するための対策資料が完成した。積み上げられた羊皮紙の束。それは、魔女狩りという悪夢を終わらせる希望の道標だ。

レオネルはその一番上の資料に、自らの手で一文を書き加えた。

『穀物に異常が見つかった場合、直ちに領主へ報告せよ。民を守ることこそ、王家の務めである』

力強い筆跡。すぐさま騎士たちが資料を抱え、伝令へと走る準備を整える。出立の直前、レオネルは整列した騎士たちの前に進み出ると、深く、静かに頭を下げた。

「この国を……そして罪なき民を救えるのは、君たちだけだ。頼んだぞ」

一瞬、時が止まった。国の頂点に立つ者が、家臣に頭を下げるなどあり得ないこと。朝日に照らされたレオネルの金髪が、揺れる。その真摯な姿に騎士たちの胸は熱く震え、背筋は弓のようにしなり、全員が一斉に美しい敬礼を返した。

「はっ!!」

轟くような返答とともに、騎士たちは疾風のように駆け出していく。その勇壮な背中を見送りながら、ガルドが苦言を呈した。

「……殿下。王家たる者が、そうやすやすと頭を下げるものではありません」

だが、レオネルは朝日に目を細め、清々しく笑った。

「民を救えるのなら、私の頭ひとつなど安いものだ」

その美しい横顔は、黄金の王冠よりも気高く、文乃の目には何よりも眩しく映った。

第三章 ✷★王子様の誕生日

黒穂病の騒動から一カ月。王都を覆っていた不安の雲は消え去り、城下には穏やかな日常の活気が戻りつつあった。

その頃——文乃は、王立図書館の一角にある分厚い石壁の書庫で、今日も羊皮紙の束と向かい合っていた。机の上には解読途中の古文書が塔のように積まれている。文乃が文字を追うたび、丁寧に編み込まれた背中まで届く長いお下げ髪が、背もたれからさらりと滑り落ちて揺れる。古びたインクの匂いを胸いっぱいに吸い込み、知識の海に溺れる。この解読作業という名の〝読書〟こそが、彼女にとって何よりの至福だった。

カツ、カツ、と。静寂を割って、規則正しい靴音が近づいてくる。まただ。もう聞き慣れてしまった、高貴さと遠慮のなさが混在する足音。

「やあ、文乃。作業は捗っているかい？」

書架の陰から顔を覗かせたのは、この国の第一王子、レオネル・リュクサールその人だった。窓からの陽光を浴びて黄金に輝く髪、サファイアの瞳。ただ立っているだけで絵画になるその美貌は、今日も絶好調に輝いている。

文乃は、黒縁眼鏡の奥の目だけを上げて、わざとらしく小さくため息を漏らした。

「……またですか。日に三度も、飽きずに毎日毎日。王子様というのは、よほどお暇なんですね」